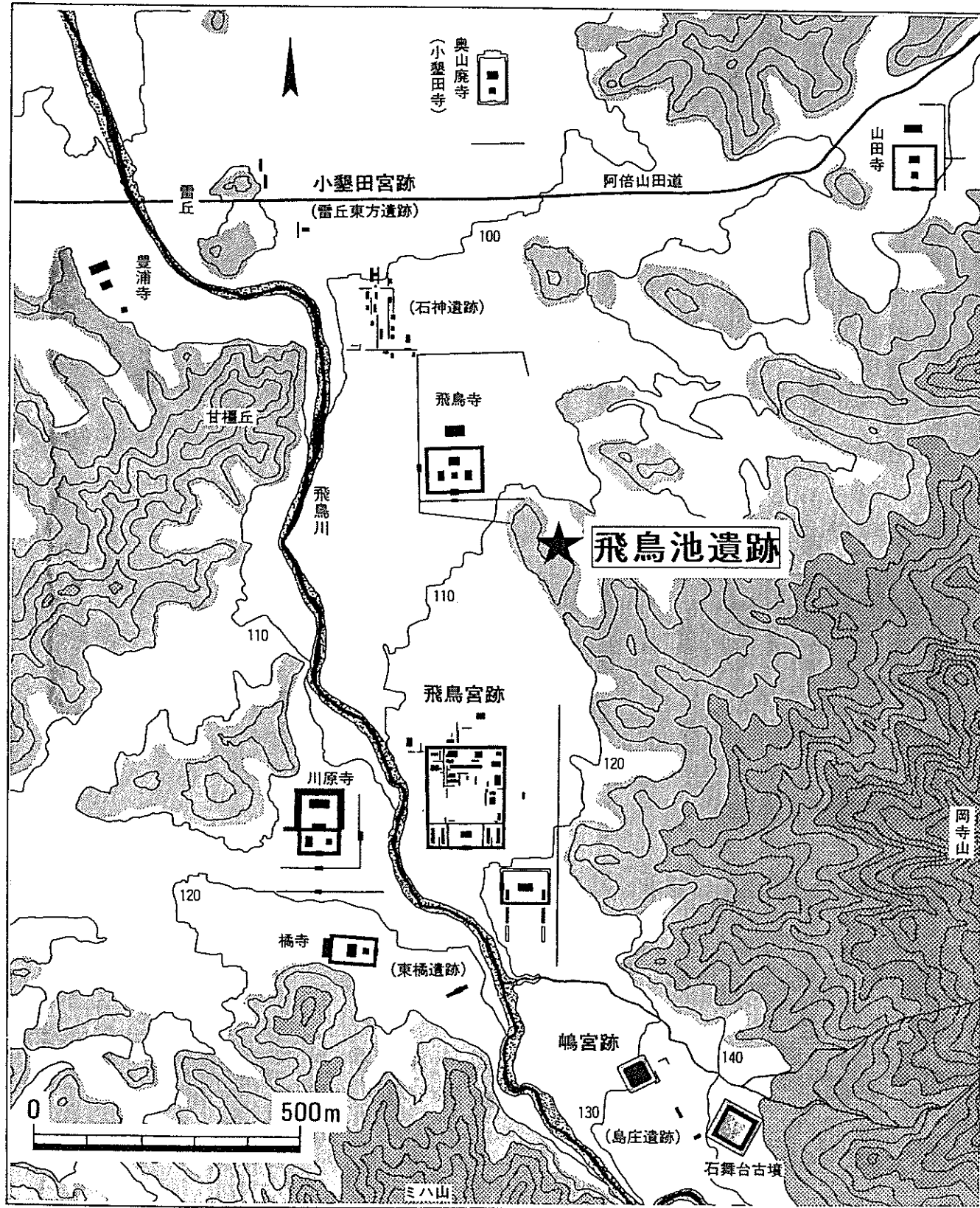


# 飛鳥池遺跡

飛鳥藤原第87次調査 現地説明会資料

1998年4月26日

奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部



## 飛鳥池遺跡とは？

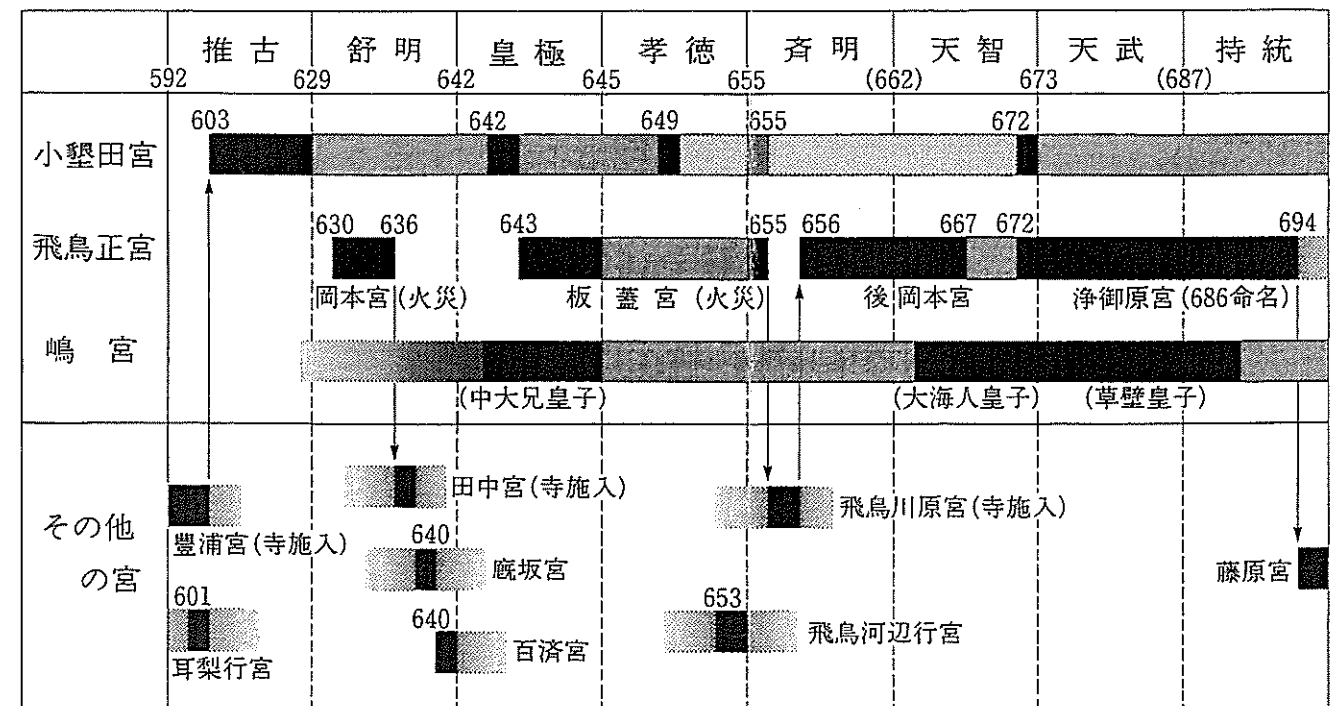
飛鳥寺の南東の谷あい、「飛鳥池」という、近世の築造とみられる溜池がありました。1991年にその池底を発掘したところ、7世紀後半の大規模な生産工房の跡が見つかりました。これを、飛鳥池遺跡と名づけています。

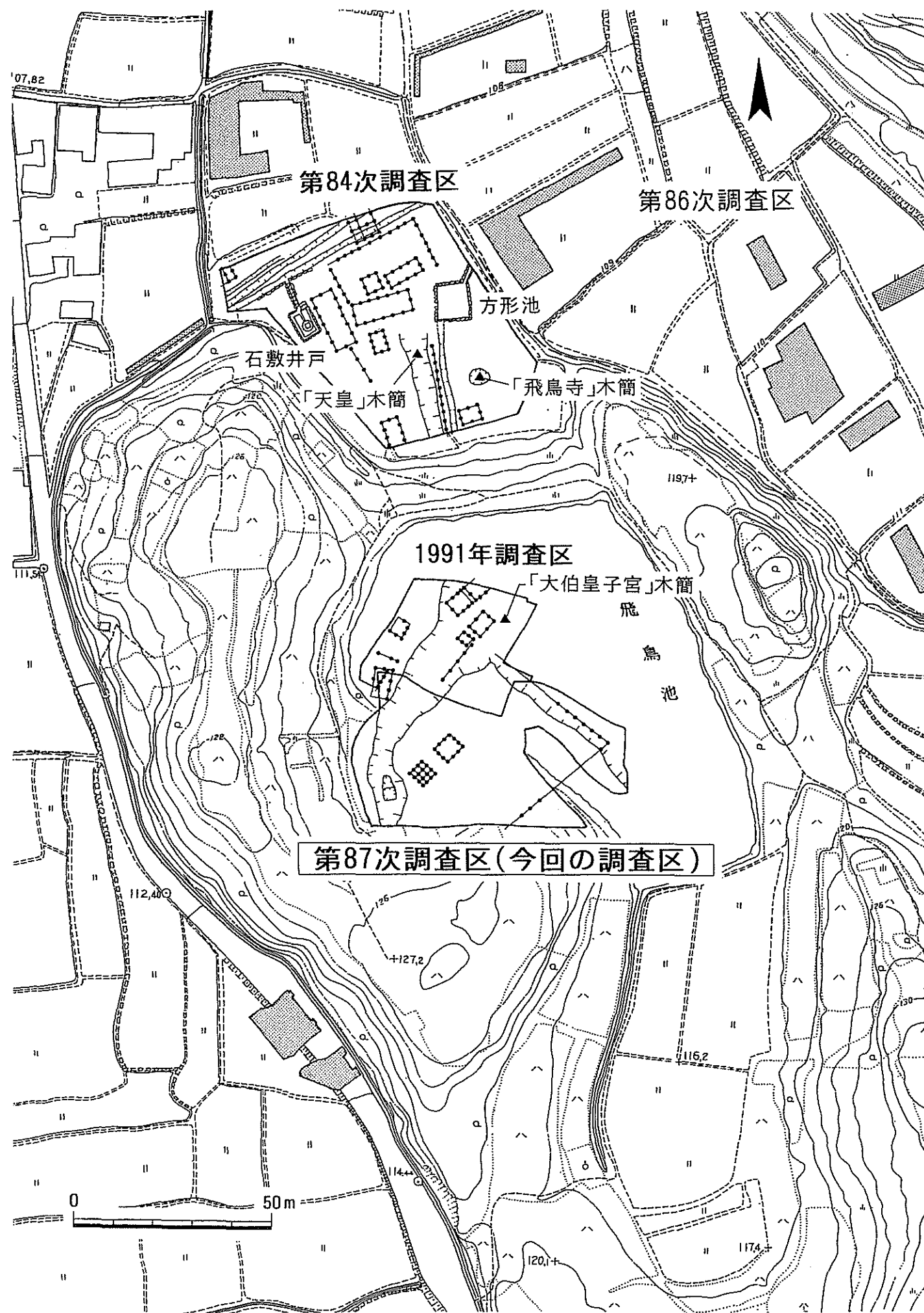
ここからは、人形(ひとがた)や釘・針・ピンセットなどの銅製品、仏像や海獣葡萄鏡(かいじゅうぶどうきょう)の鋳型、釘や鍬(やじり)・ノミ・針などの鉄製品、金属製品を注文する際の木製の見本(雛形)、木工具、漆工具、ガラスの埴塙(るつぼ)や鋳型など、多種多様な遺物が大量に出土しました。この場所で、ひじょうに広範囲にわたる生産活動がおこなわれていたことがわかります。

なかでも、炉跡やそれへの送風装置である鞆(ふいご)の羽口(はぐち)をはじめとして、鋳造や鍛冶関係の遺構・遺物が多いのが目を引きます。また、製品の供給先・原料の提供元や出荷形態を示す木筒も見つかりました。

これらの遺物の大半は、谷筋に厚く堆積した炭の層の中から出土したものです。生産時に炉で使用した大量の炭を廃棄したさいに、いっしょにいろいろなものを捨てたようすがうかがえます。

その後、万葉ミュージアムがここに建設されることとなりました。このため、1997年1月から、事前の発掘を継続しています。去年は、北部の第84次調査区で、多くの建物のほか、石敷をもつ井戸や、方形池など、注目すべき施設を確認しました。「飛鳥寺」や「天皇」と書かれた木筒が出土したことも、記憶に新しいところです。一連の調査により、この遺跡全体の解明が進むことが期待されます。





### 飛鳥の生産工房

今回の第87次調査地は、飛鳥池遺跡の存在が最初に明らかになった1991年の調査地の南に隣接した場所です。1991年の調査区は、南東と南西から流れてきた谷の合流部にあたりますので、今回は、それぞれの谷の上流部と、その中間の丘陵部分を発掘していることになります。調査は1997年12月から開始し、現在も継続中です。発掘面積は、約1900㎡です。

今回の発掘でも、7世紀後半の天武・持統天皇の時代を中心とする生産工房の跡を確認しました。遺構が集中するのは、西側の浅い谷筋の部分です。北に下る斜面を何段にもわたって削り出し、整地をおこなって、ほぼ平坦に近い作業面を造成しています。そこにたくさんの炉がつくられていました。

炉跡は、上部が削られて、底面近くをわずかに残す例がほとんどですが、基本的に、地面を浅く掘りくぼめた形態と思われます。同じ場所で、何度も作り替えをおこなったものもあります。炉底や炉壁は、高温の火熱を受けて、青灰色に固く焼けしまっています。また、炉の付近には、生産のさいに生じたカス（鉍滓）や焼土の存在も認められました。

建築関係で特筆されるのは、倉庫と推定される建物1と建物2、それらが建つ空間の東と北を限る区画塀を確認したことです。

この2棟の建物は、方向や西側の柱筋を描えており、同時に存在したことは確実でしょう。これまでに見つかっている小規模な建物とは趣を異にする、かなり立派なものです。東と北を限る区画塀も相当大型ですが、こうした嚴重な囲いをつくっているのも、それらの倉庫の存在と関係がありそうです。

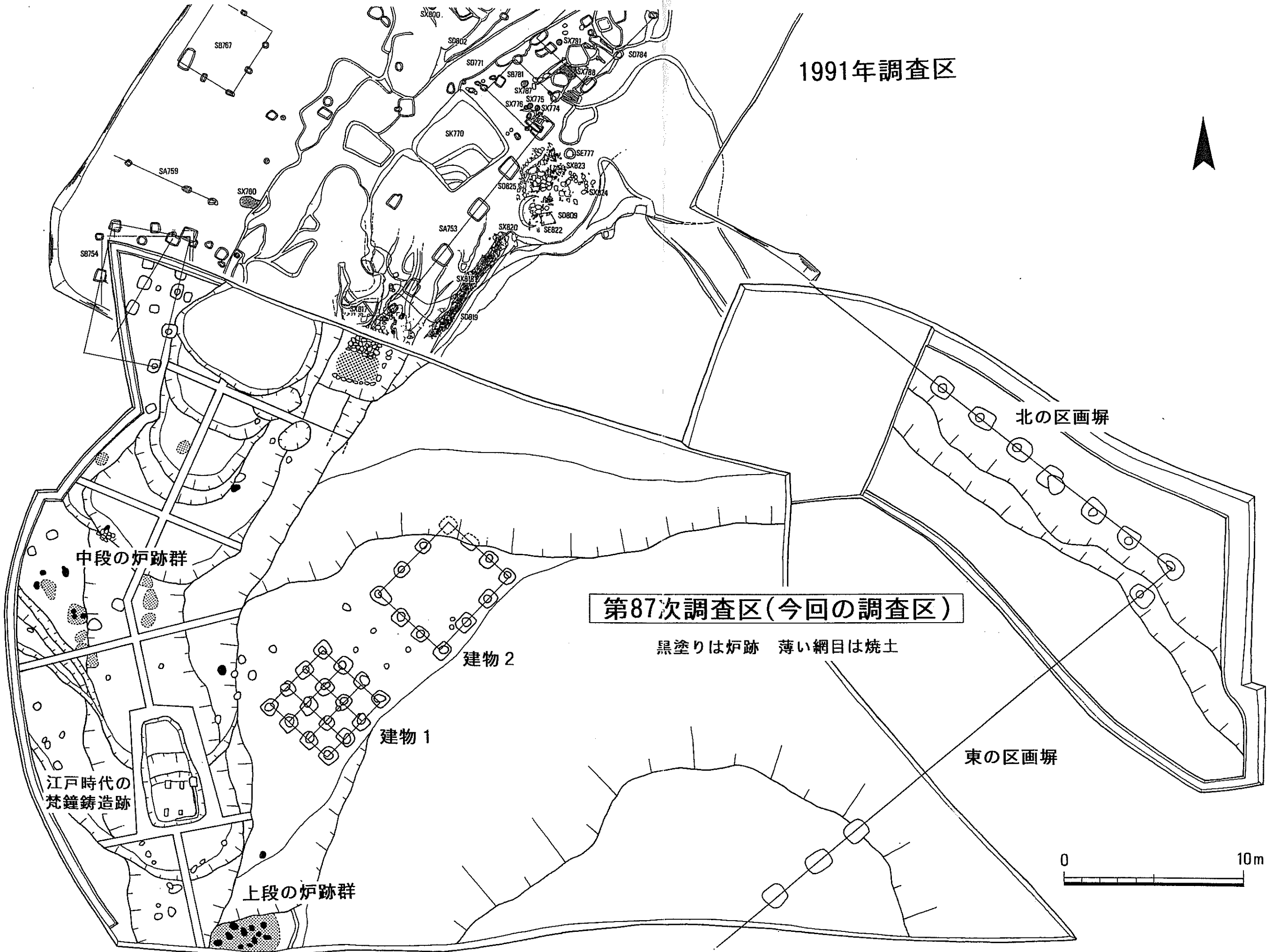
### 大量の鑄造関係遺物

今回の調査でも、鑄造や鍛冶関係を中心とする大量の遺物が見つかりました。鞆（ふいご）の羽口や坩堝（るつぼ）、仏像の鑄型や鉄釘・砥石など、北どりの1991年調査区と共通するものが多いのが特徴です。ほかに銅の箸や、素材として再利用したらしい、古墳時代の鏡の破片も出土しています。また、漆を入れた須恵器も見つかりました。漆工房で使われたものでしょう。

遺物の多くは、西および東側の谷筋から出土したもので、1991年調査区と同様、とくに西側の谷筋に堆積した炭の層からの出土量が圧倒的です。

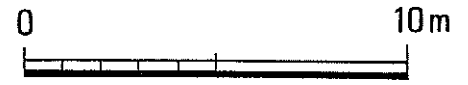
これらは、今回の調査区と、下流にあたる1991年の調査区が、一連の工房を構成していたことを示しています。いずれも、直接的な生産に従事した部門ですが、それだけでも、相当な規模を有していたことがわかります。

1991年調査区



第87次調査区(今回の調査区)

黒塗りは炉跡 薄い網目は焼土



### 玉類と銀製品の生産

今回の調査でとくに注目されるのは、あらたに、琥珀（こはく）、瑪瑙（めのう）、水晶などの玉類や、緑・青・黄・赤などの華麗な彩りをもつ、ガラス玉の製品が見つかった点です。そして、ガラスについては、それを生産した可能性のある炉の存在も明らかになりました。以前から確認されていた小玉鑄型や、ガラスを融かした坩堝（るつぼ）、原料となる石英や鉛とあわせて、ガラス玉の製作に関わる遺物一式が出そろったこととなります。

従来、ほとんど明らかでなかった7世紀の宝飾品生産の実態を解明するうえで、きわめて重要な資料ということが出来ます。

また、今回はじめて、銀を融かした坩堝の存在を確認しました。坩堝を科学的に分析した成果です。さらに、微量ながら、炉跡からも銀を検出しています。

1991年の発掘でも、銀と銅の合金が出土していますが、今回の成果は、この場所で、銀製品の生産そのものがおこなわれていたことを確定するものです。銀の製作加工を示す遺跡としては、国内最古の例となります。

天武・持統天皇の時代は、国内ではじめて銀が産出し、史料にも銀関係の記事が多くみられるようになります。それとの関連をうかがわせるものでしょう。

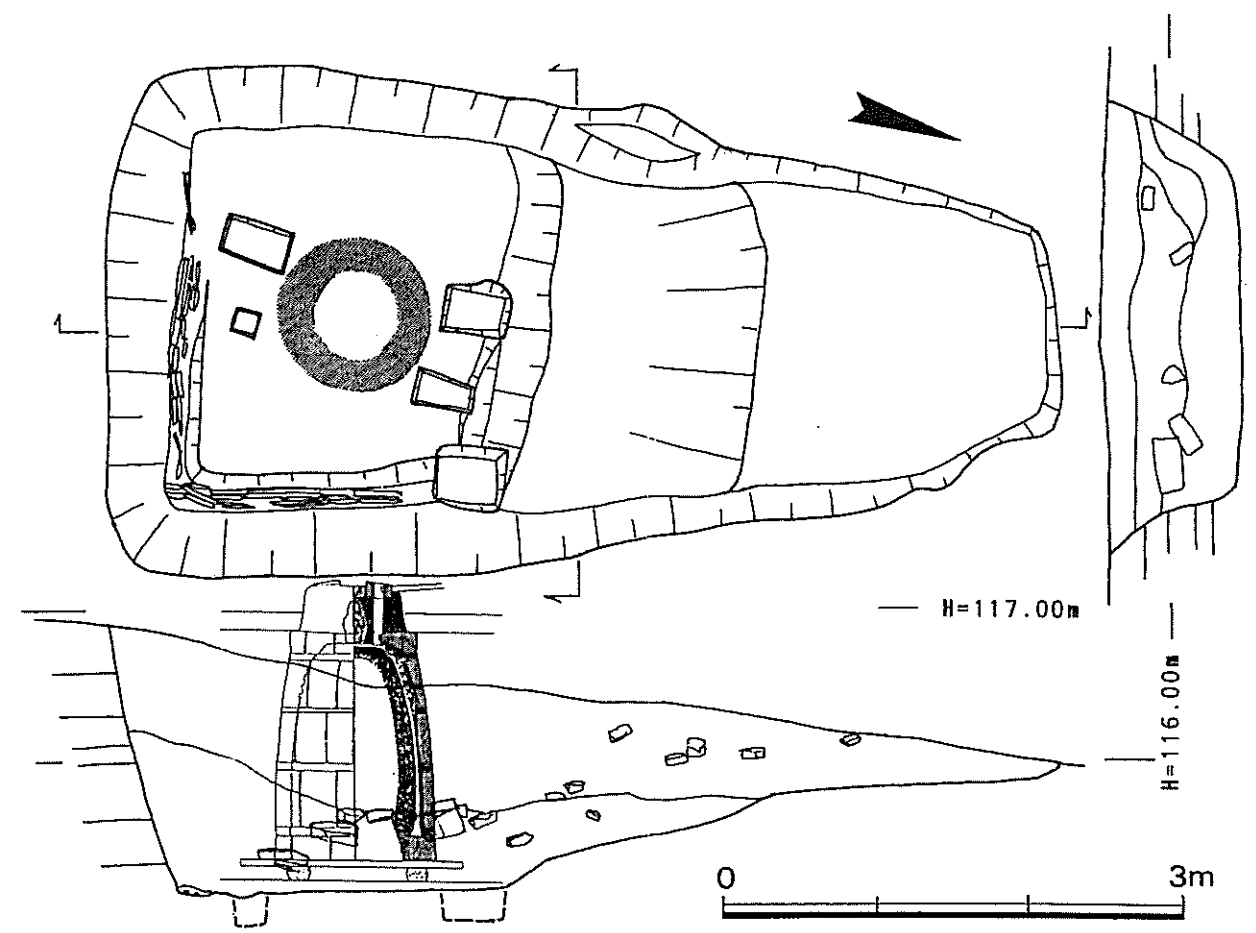
### 遺跡の特質と今後の課題

今回の調査により、従来の知見以上に、高級品を含む多様な製品が、この場所で生産されていたことが明らかとなりました。7世紀の総合的工房としての飛鳥池遺跡の重要性は、ますます高まったといつてよいでしょう。

その遺跡としての大きな特徴は、遺物以外に、炉跡などの遺構と、生産時に生じた廃棄物を捨てた堆積層が、良好に遺存している点にあります。このため、遺物の位置と遺構とのつながりを有機的にとらえることができ、そこから、生産の工程や、場所ごとの製品の違いについての復元も可能です。

もちろん、それには、多くの手間も要します。今回、微小なガラス玉や破片を含む多量の遺物をもれなく検出できたのは、炭と廃棄物の層を、全て持ち帰って水洗・選別したためです。その数は、土嚢（どのおう）で1万袋以上に達します。水洗作業は毎日続けていますが、完了までには、なお長い時間がかかります。

また、飛鳥池遺跡は、今回の調査地で完結するわけではありません。谷のさらに上（南）にも、炉跡の集中する作業面は続いていきますし、西側にも別の作業面がありそうです。今後継続していく下層部分の発掘とあわせて、遺跡の全容を解明するためには、息の長い調査が必要なのです。



### 江戸時代の梵鐘鑄造跡

飛鳥時代の工房としての飛鳥池遺跡とは直接関係しませんが、その上層から、江戸時代の梵鐘（ぼんしょう）を鑄造した跡が見つかりました。

斜面の途中に、方形の堅穴（たてあな）と、それにつづく斜道を掘ったもので、深さは、現状で1.7mほどあります。底面は、南辺と東辺の壁ぎわに浅い溝を掘り、中に竹を敷いていました。この溝は、底面の東北隅の穴につながっています。また、底面のかなりの部分で、藁を敷いたらしい状態を確認しました。いずれも、鑄造の大敵である水分を防ぐための工夫でしょう。

底面の中央部には、2つつ対になる、4つの長方形の穴が掘られています。梵鐘の鑄型は、これらにはさまれた中央の空間に据えられたことがわかります。

鑄造が終わったあと、鑄型の破片は、ほとんどが堅穴の中に捨てられていました。それらにより、鑄造方法の細部にわたる復元が可能となっています。また、「飛鳥寺」の銘文の鑄型から、これが戦時中まで飛鳥寺に架かっていた梵鐘であることが確定しました。延享2年（1745）に、五位堂の鑄物師（いもじ）が鑄造したもので、高さ4尺9寸8分、直径2尺7寸8分と記録されています。

飛鳥池遺跡で、鑄造を含むさかんな生産活動がおこなわれてから、およそ千年の時を隔てて、再び同じ場所で梵鐘が鑄造されたのもふしぎな因縁です。